



歴史学習「鎌倉時代」に関する内容構成フレームの
検討：

中学校における中世史（「鎌倉時代」）学習内容再
構築のための基礎的考察（その1）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005728

歴史学習「鎌倉時代」に関する内容構成フレームの検討

— 中学校における中世史（「鎌倉時代」）学習内容再構築のための基礎的考察（その1） —

安 藤 豊

北海道教育大学旭川校社会科教育研究室

An Examination of the Content Configuration Framework regarding the Kamakura Period in the Study of History

ANDOU Yutaka

Department of Education, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education, Asahikawa 070-8621

要 旨

歴史授業で「鎌倉時代」を教えるとき、「武士」をキーワードに政治、社会、文化の諸歴史事象を説明するのが通例となっている。しかし、その説明は合理性、整合性に欠け、中世史理解を困難にしている現状がある。一方、歴史学界における中世史研究の進展は、史観を越えて「武士」をキーワードとする歴史解釈フレームを肯定していない。この見方が歴史学習内容に反映していないのである。これが歴史学習内容として無理な解釈が流布している主な原因と観察できる。これは改善しなければならない課題であろう。

この一連の考察は、新しい中世史（鎌倉時代）学習内容を構築することを目的に、その基礎的作業として、学説史を大まかに整理し、また「武士」論、鎌倉仏教などに関する最近の研究成果を渉猟し、新しい教育内容のための情報を整理することを目的としている。

本稿では、（その1）として、主に教科書に記述されている現行歴史学習内容構成の基本フレームを与えているのが、想像以上に古く、1950年代のマルクス主義史家・石母田正の学説に根拠を置いていることを、諸家の見解に就いて指摘する。この意味で中世史学習は、永らくイデオロギー的に偏向した史観に依拠して教えられてきたことになる。

次稿以降、石母田学説とそれに対する批判が同じマルクス主義史学の内部批判として提起され、それがいわば定説化しているにもかかわらず、歴史教育の内容として十分に反映していない現状、この内部批判説の淵源である平泉澄の中世社会論、1970年代の内部批判論などの学説史的整理、「鎌倉仏教論」の検討、進んで「武士」をキーワードに、仏教や文学、美術などを「鎌倉文化」と括って解釈し、教育内容とするものの不整合にも言及する予定である。

キーワード：鎌倉時代 武士 歴史学習 教育内容

はじめに

最近、ある機会に大変インパクトのある言説に接した。今谷明『謎解き中世史』中の次の文章である。長いが引用してみよう⁽¹⁾。

中世はかつて「武家社会」と呼ばれたように、武士はひとつの社会階級として中世史のいわばトレーガー（担い手）として位置づけられていた。皇国史観から解放された戦後、鎌倉幕府の成立は中世の始まりをつげる画期的事件と見なされ、そこに結集した武士たちは、進歩的・革新的勢力として高く評価された。その代表は戦後一時期、歴史学界をリードした石母田正^{いしもただし}であろう。

石母田は鎌倉幕府を「優れた政治形式」と言い、貞永式目に関しては「形式的律令とは別個に人民の法が存在すべきとの確信が（中略）述べられている」と高らかにうたいあげた。幕府の制定法を「人民の制定した法」とまで言い切ったのだから、鎌倉幕府は「人民の政府、であって、武家・武士は「人民の代表」と見なされたことは勿論である。

さすがにここまで極端にいう学者は石母田の外は少なかったが、右の考え方は大筋は学界の主流となり、現在普及している中高校の教科書も大半はこの線に沿って叙述されている。

一方、戦前から、武家の力はそんなに大きくないとする見方があった。中世は公家・寺社・武家の三者が鼎立^{ていりつ}して国家を構成していたとする考え方で、早くに平泉澄^{きよし}がこの見解を提唱し、戦後は黒田俊雄がこの見方を発展させて「権門体制論」に結実させた。

平泉澄は皇国史観の権化のようにみられるが、彼の中世社会史観は、実は戦後マルクス主義史家、黒田の説の源流に位置するものだった（黒田は自説が平泉の亜流とみられることを意図的に嫌ったものか、自説中に一切、平泉を引用しない）。いずれにせよ、平泉・黒田両史家の考えかたは、中世において武士・武家を出出して評価することに反対する点で一致している。（ふりがな原文）

また、中世史家・上横手雅敬も、敗戦後、忠孝などの封建道徳は厳しく批判されたが、「質実剛健」「逞しい」とする武士観はさほど変化せず、「公家から武士の時代への移行は発展であり、よくなることだと考えられてきた」⁽²⁾との観測を述べ、この「移行」の説明の仕方を、次のように揶揄したことがあった。これも長いが引用してみよう⁽³⁾。

敗戦後はこれにマルキシズムが加わり、武士道史観と階級闘争史観とが奇妙にドッキングした。その結果腐敗した支配階級である貴族の圧政下で、しいたげられていた武士が、苦難に満ちた闘争の末に、かれらの政権を打ち立てるという筋書きが作られた。

ところがここで厄介な問題が起こった。武士が貴族と闘うのは結構なことだが、民衆にとって武士もまた支配者なのである。得々として武士の成長を説いてきた教科書は「耳をきり、鼻を削いで」民衆を苦しめる武士の蛮行についても、口ごもりながら語らざるを得なくなった。（後略）（ふりがな原文）

一方、日本仏教史の研究者であり、実教出版『日本史B新訂版』（高校教科書 2008年）の執筆者の一人である平雅行は、歴史学の世界では中世史のイメージが大きく変化したとし、この教科書では中世は「鎌倉幕府」ではなく院政を画期とする時代区分を採用した、それはすでに1970年代に定説化していたと説明している⁽⁴⁾。

そして、「中世とは武士の時代だ」という考え方はすでに破綻しているとし、その理由を「中世＝武士の時代、説では、それが消滅する対象と認定した朝廷・律令、荘園制度や旧仏教など古代的レジュームが、「鎌倉時代」を越えて戦国時代まで残存し、現実に機能していたことが説明できないと指摘している⁽⁵⁾。

中世はむしろ古代的レジュームが「中世的な存在に生まれ変わった」⁽⁶⁾と認識するべきで、このような視角で中世史の再構築を図るべきとしている⁽⁷⁾。

このような研究史上の認識を前提に、平はこのような中世史像の変化は、宗教史にも深く関係のあることで、宗教史はこの30年で激変したといってもよい変化を見せているとし⁽⁸⁾、その概要を次のように解説している。

結論的にいうと、「鎌倉新仏教」説は成立しないとする。この見解は黒田俊雄に「顕密体制」論(1975年)に淵源をもつという⁽⁹⁾。

説明によると、次のようである。

従来は鎌倉新政権に対応するかのようにならぬ、親鸞、道元、日蓮などの思想的営為によって仏教に新解釈と改革が行われ、いわゆる「鎌倉新仏教」が開かれ、仏教の民衆化が開かれ、宗教史上の画期となったと説明された。

しかし、彼等の教えは中世社会に普及しなかったし、殆ど影響力を持たなかったという⁽¹⁰⁾。仏教の民衆化というが、例えば「悪人往生」説や「女人成仏」はすでに平安後期の仏教書に多く現れているし、藤原宗忠『中右記』の1120年の記事や『梁塵秘抄』に拾われた今様にも見ることができ、すでに世俗社会の常識として流布していたということができ、とても「鎌倉新仏教」の新境地と言うことができないという⁽¹¹⁾。

そして中世(「鎌倉時代」)の仏教改革のトレーガーは、むしろ旧仏教であったとする⁽¹²⁾。

それは律令体制下における寺院、尼僧は、いわば国家公務員として、律令国家に保護されていたが、律令の実質的崩壊を意味した平安中期(10世紀頃)からの王朝国家への国家再編⁽¹³⁾過程で、いわば寺院の民営化が図られ、国家の保護を失い、経済基盤を自力で確保しなければならなくなり、貴族や民衆を積極的に組織するようになったという。「講」は一向一揆で有名だが、これは旧仏教がはじめたことだという。末法思想を積極的に喧伝、普及し、仏法への帰依を煽ったもこのような動向の一つだという⁽¹⁴⁾。

このような状況下、教義面でも「戒律」(律法)がキーワードとなる改革がおこなわれたとする⁽¹⁵⁾。それは、法相宗(中心は、藤原氏の氏寺でもある興福寺)の貞慶(じょうけい)(後に笠置寺)や

良遍、真言律宗の叡尊(西大寺)、天台真言で戒律をかかげた俊苒、華嚴宗で戒律を掲げた明恵、禪と戒律の栄西に代表される、いわば仏教の復興運動で、先に紹介したような仏教の民衆への開放、国家権力の一部に組み込まれ世俗化が進みすぎた僧の戒律の再興、行基を思わせる慈善救済活動の広範な実施などの仏教改革運動であったという⁽¹⁶⁾。

鎌倉期における仏教の主流は、これら改革された旧仏教であり、貴族も民衆も皆これに帰依していたのであり、いわゆる新仏教は殆ど影響力をもっていなかった。そして中世期全体を通して、旧仏教はそれを貫く文化体系であり、時代を蔽うソフトパワーであったとしている⁽¹⁶⁾。

そしていわゆる「鎌倉新仏教」が自立・発展していくのは戦国時代に仏教界に下克上が起こり、旧仏教・五山派にかわって日蓮宗、浄土真宗、曹洞宗などが教団を形成するようになってからで、そもそも「鎌倉新仏教」との謂いは、江戸時代に独自の宗派として認められたもののうち、鎌倉期に宗祖をあおぐものをそのように呼んだにすぎず、鎌倉期の実相を現しているのではないとする⁽¹⁷⁾。

さて、長々と要約引用したが、要するに武家政権という革命政権が成立し、それに見合って宗教界でも革命が起こされ新宗教が成立し、社会のシステムが何もかも新しくなった、訳ではないのである。

既往の、そして現行の歴史教育では「鎌倉時代」を、現行の教科書記述を一々示すまでもなく、武士という非抑圧階級が王朝=貴族という古代的階級を倒す革命に成功し、新政権を樹立、一方浄土教など民衆的宗教が王朝=貴族的旧仏教を否定して支配的思想として入れ替わったと教えてきたといってもよいだろう。

冒頭記したようにこのような歴史認識は剥き出しの階級闘争史観にもとづくものであった。歴史学会ではすでに大幅な修正が行われている。それが長い間歴史教育の内容論に反映してこなかった。

学習指導要領もふくめて戦後の歴史教育は階級闘争史観に支配されてきた。近年、古代史と近代史で若干の改善が見られるようになった。近世史

でも、一揆史観が根強く残存しているが、一定の改善が見られようになった。

しかし、私見では、中世史－「鎌倉時代」は、上述のように剥き出しの階級闘争史観で教育内容が構成されている。

本稿の目的は、新しい教育内容構築のため、学説史を手繰りながら中世像を検討することである。

【註】

- (1) 今谷明『謎解き中世史』 p.64 洋泉社 1997年
- (2) 上横手雅敬『日本史の快楽－中世史に遊ぶ』 p.156 講談社 1996年
- (3) 同上 pp.156-157
ただし、ここで言われている上横手の「武士＝ヤクザ」説への意見は保留しておく。この説は、野口実『武家の棟梁の条件－中世武士を見直す』（中公新書、1994年）によって提起されたものである。
- (4) 平雅行「中世史像の変化と鎌倉仏教1」 pp.1-2 『じっきょう 地歴・公民科資料』 No.65 (2007.11.21) 実教出版
- (5) 同上 pp.3-4
- (6) 同上 p.4
- (7) 同上 p.4
- (8) 同上 p.1
- (9) 同上 p.4
- (10) 同上 p.4
- (11) 平雅行「中世史像の変化と鎌倉仏教2」 p.3 『じっきょう 地歴・公民科資料』 No.66 (2008.03.07) 実教出版
- (12) 同上 p.4
- (13) 一般的には延喜の荘園整理令（902年）で知られる延喜・天曆の治（宇田天皇・醍醐天皇の治）を画期とする律令国家の再編をいう。律令の人頭税である租庸調税体系を土地税である負名体制に切り替えるなど新しい王朝国家システムを構想したのは菅原道真であったとされる（平田耿二『消された政治家 菅原道真』文春新書 平成12年）
- (14) 註(11) 同上 p.3
- (15) 同上 p.1
- (16) 註(4) 同上 p.5
- (17) 註(11) 同上 p.2

(以下、次号)

(旭川校教授)